國民に宗教的自覺を促すことに大なる目的を置いたことの諸事項であるが、其等各項相互の關係は說明されず斯く書き綴る意圖は明らかでない。事象の順序は其等に對する理解により決定されるとき、撰擇した對象をその意味に從ひ、序列するところに史家の重要な一面が考へられるのである。また（宇津保物語の天上國について）は最初八頁を費して當時行なはれた天上・地獄遍歷思想の諸形態を論じ興味あるものであるが、次に九頁に亘る宇津保の天上國遍歷との關係は何等論及されず、ただ讀者の推量するところ、最後に宇津保の篋蓡が日本人として歸鄉したことを述べてあるのが他の諸物語との差異を示すことであるかもしれない。左樣ならば、此點に重心を置きその立場において諸型に對する綜合的說明を加へることが望まれるのである。他の諸篇にも斯かる希望を抱く反面、著者が「國民精神の個々の狀態を論ずるに總體的にしようと考へた爲に却つて漠然としたものになり、全體的綜合的方面に幾多の缺陷を生じた」と認めてゐられる（鎌倉時代に加はる文藝復興と國民精神）の短篇（十三頁）をまとまりのある、示唆に富む好篇と考へたい。しかし生命に躍入し歷史に隨順することが著者獨自の面目である。爲にその研究は鮮新にして叙述は無凝讀書をして大なるよろこびを抱かしめる。再讀して彌々啓發されること多きを思ひ、本書紹介の機を得たことを喜ぶとともに言辭非禮の點は御海容を御願する次第である。尙附錄として、著者の「人生と表現」時代の同人三井甲之氏の論文（鎌倉時代の道德・宗教・藝術）が特別の意味でもつて收載されてゐることを記して置く（本文四六六頁、附錄三二頁、定價五圓、河出書房發行）（藤直幹）

神道說苑

江見清風著

故江見清風翁は明治、大正、昭和の三代にかけて神道界の碩學として今にその學德を欽慕せられてゐる。翁は明治二十七年國學院大學豫科を卒業して史料編輯所に職を奉ぜられたが、後彌彦神社、神宮、八坂神社、明治神宮、春日神社等に奉仕せられ、しかもその間に國史と國文との兩方面にわたつて須臾も學事より離れる事なく、常に新たなる研究の結果を發表して學界に貢獻せられた。

本書は翁のこの學的方面の功勞を記念する爲に、翁が種々の機會に發表せられた論文の中より、神道に關するもの六篇を擇んで收錄せるものである。

一體神道史の研究に於て我々が逢着する最も大なる障害は、史料の蒐集の困難と、我々が神社奉仕の實際に就いて理解のない所より來る難澁との二つであらう。而してもしこの兩者を克服し得たとするならば、その研究の結果が如何に學界に裨益するかは論をまたないであらう。卽ち翁がその奉仕生活の間によくこの兩方面の困難を克服して、該博なる知識と、周到なる研究によつて內外に推服せらるゝ所以の一つはこゝに存する。

今その一々に就いて見るに、「五部書神道の祖述者及び其の神道

說」は、明治四十二年神社協會雜誌に發表せられたものであつて度會神道の先驅者行忠と、その完成者家行に就いて論ぜしもので同雜誌に明治四十五年に掲載せられ、本書に收錄する「出口延佳神主の事績と學說」と共に、山田に於て調査せられた翁の勞作であつて、未だ學界に於ては關心を有たれてゐなかつた時代に、早くも度會神道の價値を認識してその研究に着手せられた事は最も敬服に堪えない。

又明治四十四年一月より一年に亘つて國學院雜誌に連載せられた「唯一神道論」は、兼倶の諸說、その神道說、唯一神道を創說せる所以、その弘布の方法及び結果等を詳細に論じたもので、率先して未開拓の分野に組織的卓見を披表せられたものであり、「吉田家の吉田神社に於ける奉仕並に其の信仰の一斑」(昭和十三年、神社協會雜誌)なる翁の絕筆の論文と共に、唯一神道研究の上に於けるその功績は永久に不滅であらう。

又、「竹內式部君神都蟄居中の事蹟及び學說一端」は、式部の傳記中從來不明であつた寶曆九年より明和四年に至る九年間、卽ち式部の神都蟄居中の事蹟を究明せしものであり、翁の伊勢在住中の勞作である。

「祝年祭祝詞及大神宮辭別の詞」は、大正八年二月十六日當時の祭主久邇宮多嘉王殿下に御進講せられた案文である。

以上六篇、神道史研究の上に於て或は未墾の野を開拓し、或は組織的體系を樹立される等、その學界に盡された所は僅小ではなかつた。

本書が翁と親交ありし宮地直一氏や高弟押木耿介氏等の盡力によつて、廣く天下に頒たれ、翁の學德を偲ぶ資となつた事は誠に意義深い事であらう。(明治書院、定價參圓)(淵原宣雄)

考史遊記

桑原隲藏著

普通に旅行記とか遊記などといへば、半日か一日もあれば手輕に讀み了へうるやうに思ひ勝ちであるため、舊四六倍型、三〇〇頁にあまる本文に、二七一葉を計へる圖版をそへた大册を手にしては、まづ誰でもがその尨大さに一驚する。本書は、博士が嘗て清國留學中に歷遊された三回にわたる大旅行、「長安の旅」「山東河南遊記」「東蒙參古紀行」の三篇より成り、卷頭を第一回の長安・洛陽への旅に同行された宇野哲人、第三回目の東蒙古旅行を伴にされた天野仁一兩博士の序文が飾つてゐる。これらの三大紀行はその昔雜豫二州旅行日記、山東河南地方遊歷報告書、或は東蒙古旅行報告書として、いづれも雜誌歷史地理の誌上を賑はしたものであるが、しかし何分にも三十餘年以前のことではあるし、一般の人人には容易に見るをえないものであつたため、その繙まつた出版はしきりに望まれるところであつた。幸にも今日それらの希望がかなへられたことについては、本書出刊に當り斡旋役として博士の舊記の整理、圖版の挿入配置などに高端の手配をされた桑鹿三氏のなみなみならぬ苦心に對し感謝しなければならない。